

農業施設建築に係る
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告

富山県婦中町

外輪野Ⅰ遺跡 発掘調査報告

1997年3月

婦中町教育委員会

序

婦中町は美しい自然環境に恵まれた土地にあり、古くから先人が残してきた生活の痕跡が多く見受けられます。

外輪野Ⅰ遺跡は、文化財の宝庫である射水丘陵を背後にして形成された遺跡であり、本書は当遺跡において実施した農業施設建築に先立つ発掘調査の結果を報告するものです。調査では、現在畑になっている場所の下に二時期の建物跡が見つかりました。こういった遺跡には祖先の暮らしの一端が窺え、郷土の歴史を学ぶ資料として守っていくべき町の貴重な財産となるものです。

本報告書は小冊子ではありますが、文化財に対する理解をより一層推進させる為に役立てて頂けることを念じております。

最後に快く調査にご協力いただいた地元の皆様及び関係各位に深く感謝申し上げますとともに、今後の変わらぬご指導、ご支援を心からお願い致しまして、序にかえさせて頂きます。

平成9年3月

婦中町教育委員会

教育長 清水信義

例　　言

1 本書は、富山県婦負郡婦中町外輪野地内に所在する外輪野Ⅰ遺跡の埋蔵文化財調査報告である。

2 調査期間・面積は次の通りである。

　　調査期間 平成8年9月17日～平成8年10月11日（延べ14日間）　　調査面積 約80m²

3 調査体制は以下の通りである。

　　調査担当者 婦中町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 片岡英子

　　同 同 文化財保護主事 堀内大介

　　調査事務局 婦中町教育委員会 生涯学習課 課長 鍋山 徹

　　同 同 文化振興係長 山田茂信

　　作業員の確保については、婦中町シルバー人材センターの協力を得た。

4 資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者がこれに当たった。

5 資料整理期間中、高梨清志氏から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。

6 本書の挿図・写真図版の表示は次の通りである。

　　方位は真北、水平基準は海拔高である。

　　遺構の表記は次の記号を用いた。掘立柱建物：SB 溝：SD 土坑：SK ピット：SP

7 出土品及び記録資料は婦中町教育委員会が保管している。

8 発掘調査・整理作業参加者は次の通りである。

　　中坪千春・生田寿美子（整理作業員）

　　河西英津子・海道雅子・本村徹・藤田良子・柄谷朋子・鈴木由紀・戸籠暢宏・貫井美鈴（整理補助員）

本 文 目 次

序 文	III 調査の概要.....	3
例 言	1 概況と層序.....	3
目 次	2 遺構.....	3
I 遺跡の位置と環境.....	(1)下層.....	3
II 調査の経緯と経過.....	(2)上層.....	6
1 調査に至る経緯.....	3 遺物.....	6
2 調査の経過と方法.....	IV まとめ.....	6
3 座標軸の設定.....	参考文献	
	写真図版	
	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図と遺跡一覧	第5図 上層平面図及び断面図
第2図 調査対象面積と区割図	第6図 遺物実測図
第3図 基本層位模式図	第1表 過去の調査一覧
第4図 下層平面図及び断面図	

I 遺跡の位置と環境

婦中町は富山県の中央部にあり、北側・東側は県庁所在地である富山市と、西側は小杉町・砺波市と、南側は八尾町と接している。町の地形は、概ね西側の丘陵部と東側の平野部に二分される。丘陵部は県中央部に南北に走る呉羽丘陵から南方の牛岳へと連なる丘陵であり、山田川によって二分されている。一方、平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。

本書で報告する外輪野I遺跡は、富山県婦中郡外輪野地内に所在し、地理的には呉羽丘陵の南方に連なる丘陵の南裾部にあり、山田川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。遺跡に接している県道沿いには現在小集落が形成されており、本遺跡はそれらを取り込むようにして存在している。歴史的には、周辺に旧石器から近世に至るまでの多くの遺跡が存在する環境にある。まず縄文時代の遺跡としては、近隣にある鏡坂I・III遺跡の他、山田川を挟んで南側の丘陵にも富崎城西遺跡などの遺跡がある。次に弥生時代の遺跡では、富崎城跡に四隅突出型埴丘墓があることが特筆される。古墳時代の遺跡には、北方にある動使塚古墳・五つ塚や、南方にある富崎千里古墳群といった古墳が目立つ。中世には、背後の丘陵に長沢城跡・家老屋敷跡、南方の丘陵に県内屈指の規模を誇る富崎城跡などといった山城が配置されている他、東方に中世寺院跡の可能性が考えられている蓮花寺遺跡がある。また、周辺には砺波に抜ける旧道が通っていたとされ、交通の要所といえる場所に位置していたといえる。



No.	遺跡名	時代	10	外北日遺跡	不明	11	外北C遺跡	不明	12	外北D遺跡	不明	13	古庄遺跡	不明	14	下原山遺跡	不明	15	鏡坂I遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳
1	外輪野I遺跡	縄文・中世	11	外北C遺跡	不明	12	外北D遺跡	不明	13	古庄遺跡	不明	14	下原山遺跡	不明	15	鏡坂I遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳			
2	鏡坂II遺跡	縄文	12	外北D遺跡	不明	13	古庄遺跡	不明	14	下原山遺跡	不明	15	鏡坂II遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳						
3	鏡坂I遺跡	縄文	13	古庄遺跡	不明	14	下原山遺跡	不明	15	鏡坂II遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳									
4	蓮花寺遺跡	中世	14	下原山遺跡	不明	15	鏡坂II遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳												
5	鏡坂II遺跡	中世	15	鏡坂II遺跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳															
6	家老屋敷跡	中世	16	富崎城坂道跡	弥生・中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳																		
7	長沢城跡	中世	17	富崎城西遺跡	縄文	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳																					
8	鏡坂II遺跡	中世	18	高崎町野邊跡	縄文・古代・中世	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳																								
9	外北A遺跡	不明	19	富山城跡	縄文・弥生・中世	20	富崎千里古墳群	古墳																											

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/20,000) 及び一覧

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

本遺跡は、平成5年度に実施された国道改築改良工事に係る分布調査で中世土師器が採集された為、遺跡立地推定地とされた。遺跡範囲については、北端は試掘調査による確認を行っていない為明らかではないが、南端は平成8年度の国道改築改良工事に係る試掘調査で確認された谷状の落ち込みまでを範囲とするものと思われる。

平成7年度、遺跡推定範囲において農業施設の建築が計画され、同時にそれに先立つ試掘調査を実施した。その結果ピット等の遺構が確認された為、翌年に建物部分を中心に埋蔵文化財を記録保存する為の本調査を行う事となった。本調査対象地区は遺跡の北西部に位置し、現況は畠地である。

調査の期日	調査の種別	原 因	発掘面積 (対象面積)	備 考
平成5年12月	分布調査	国道359号線改築 改良工事		外輪野Ⅰ遺跡発見。中世土師器を採集。
平成7年12月	試掘調査 (第1次発掘調査)	農業施設建築工事	23m ² (188m ²)	土坑、ピットを確認。
平成8年9月	試掘調査 (第2次発掘調査)	国道359号線改築 改良工事	177m ² (5,200m ²)	土坑、溝を確認。須恵器、近世陶磁器出土。
平成8年9月～ 10月	本調査 (第3次発掘調査)	農業施設建築工事	80m ²	本書で報告。

第1表 過去の調査一覧

2 経過と方法

調査の手順としては、まず機械掘削によつて表土除去を行った。上下層ともに遺物包含層は無く、上層遺構は構築面では形状が不明確であった為、下層遺構と同時に調査することにした。その後は、人力によって遺構検出及び遺構発掘を行つた。

3 座標軸の設定

座標は南北をX軸、東西をY軸とする。基準杭は調査区の形状に沿うようにして任意に設定した。0原点は、国土地理院設定の公共座標第7系のうち $x = 71434.75\text{ m}$ ・ $y = -4762.50\text{ m}$ の点とし、X軸は真北から西へ $11^{\circ} 40'$ 傾くものである。また、1グリッドは $2 \times 2\text{ m}$ を単位とし、X軸は北方に向く、Y軸は東方向に向かって数値が増えていく。今回の調査範囲は $X = 0.5 \sim 7.5$ 、 $Y = 1.5 \sim 4.5$ となる。



第2図 調査対象範囲と区割図 (1/2,000)

III 調査の概要

1 概況と層序

調査対象地区は、数回の整地によりかなり土が動かされているよう、特に南側は地山面に及ぶ深い削平を受けている。地山面の標高は、82.50～82.70mで、東側がやや高くなる。

確認された遺構面は大まかには2面ある。一帯の基本的層序は、上から順に第1層：暗オリーブ褐色土（表土）、第2～7層：（整地層）、第8層：黒色粘質シルト+地山粒状（上層遺構構築面・整地層）、第9層：（下層遺構構築面・漸移層）、第10層：にぶい黄色粘質シルト（地山）となる。遺物包含層は無く、遺構に伴う遺物も無かった為、各遺構面の層年代は不明である。

上層遺構構築面の上には、整地層が1層から4層重なっており、その厚みは10～60cmを測る。また、地表から地山面までの深さは40～70cmである。

2 遺構

(1) 下層

検出された主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑5基、溝4条、ピットである。南側は削平を受ける為、北側のはうが遺構密度が比較的高い。以下、各遺構毎に記述する。なお、掘立柱建物の柱列の表し方は、柱穴番号-柱穴番号とする。

掘立柱建物（S B01）

6-1・1-2・2-7で囲まれた部分が建物推定範囲で、更に東側調査区外に伸びる。柱穴は直径30cm前後を測り、深さはやばらつきが見られ、浅いものは10～15cm、深いものは20～30cmを測る。間尺は6-1は250cm+220cm、1-2は220cm、2-7は200cm+220cmを測る。

土坑

S K01 長軸230cm・短軸65cm・深さ30cmの楕円形の土坑で、覆土には炭化物が少量混じる。

S K03 長軸240cm・短軸85cm・深さ25cmの楕円形の土坑である。

S K04 深さ40cmの土坑で、覆土には炭化物が少量混じる。S B01と同時期のピットに切られる。北西側は調査区外に伸びる。

S K05 深さ25cmの土坑で、北側は調査区外に伸びる。

S K06 深さ25cmの土坑で、東側は調査区外に伸びる。

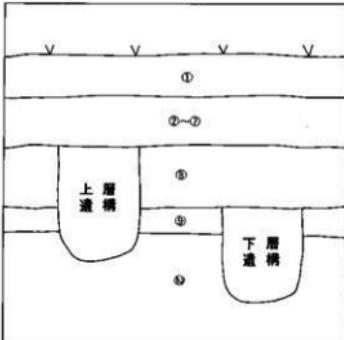
溝状遺構

S D01 南東方向に走り、幅50cm・深さ35cmを測る溝である。S K04・S D04に切られる。東側は調査区外に伸びる。

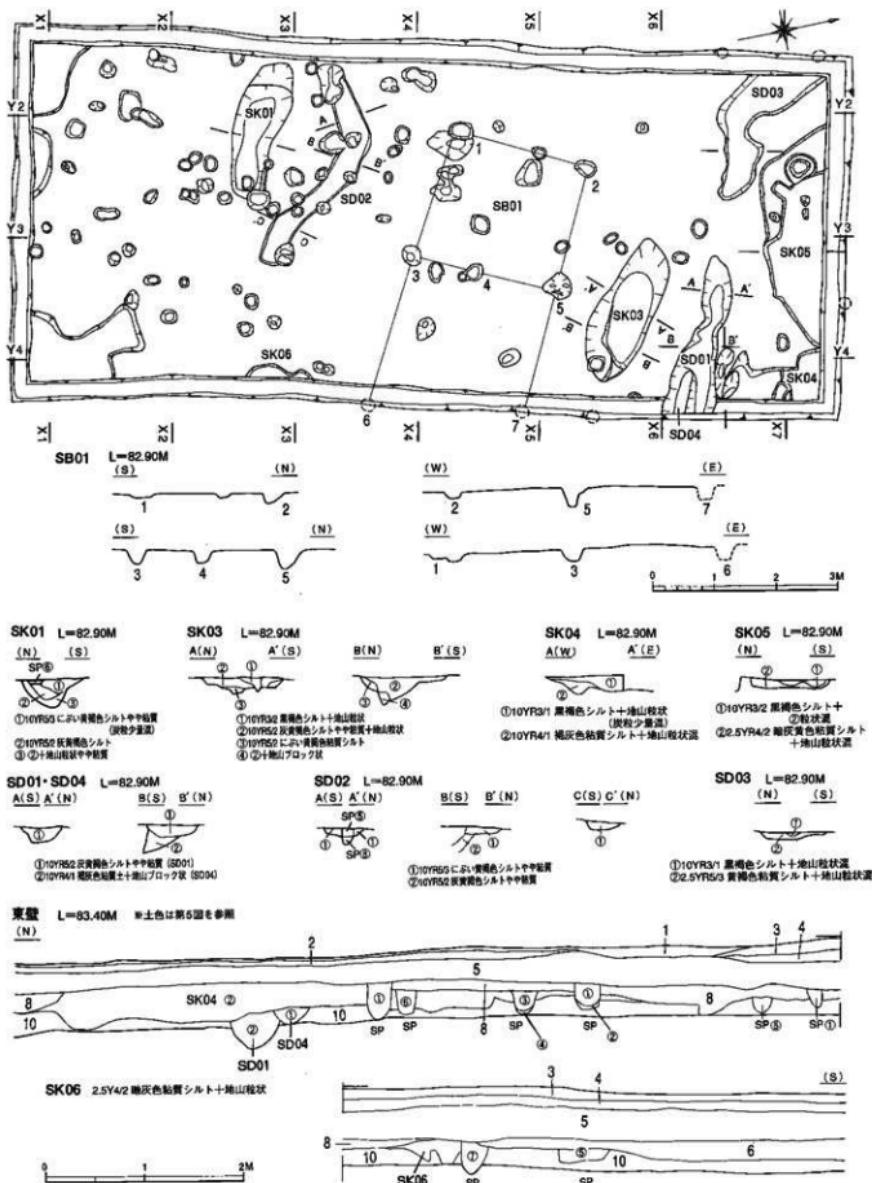
S D02 南東方向に走り、幅40cm・深さ10cmを測る溝である。浅くて覆土も單層であることから、存在期間は短期間であったと思われる。

S D03 南東方向に走り、幅65cm・深さ10cmを測る溝である。

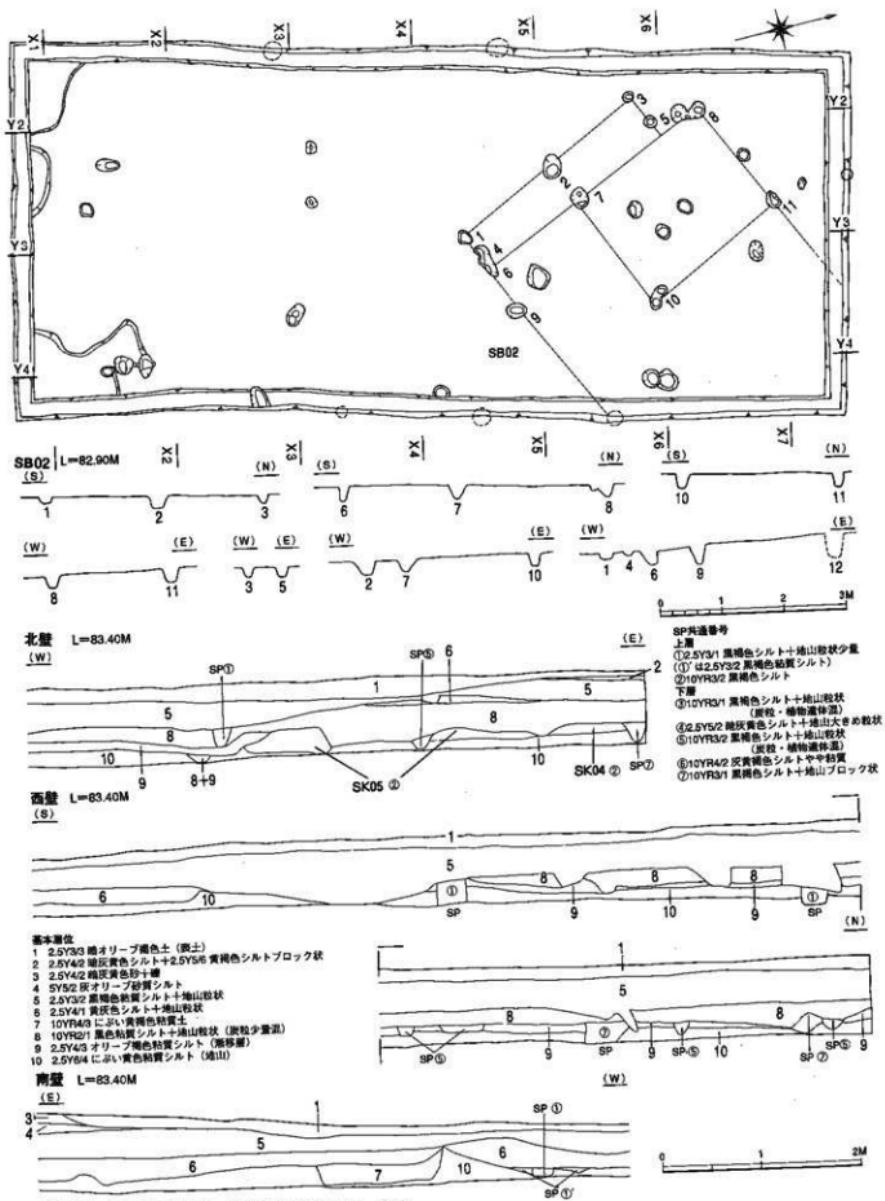
S D04 南東方向に走り、幅35cm・深さ20cmを測る溝である。S D01を切り、S K04に切られる。東側は調査区外に伸びる。



第3図 基本層位模式図



第4図 下層平面図 (1/80) 及び断面図 (1/50) ま SPの土色は第5図を参照



第5図 上層平面図 (1/80) 及び断面図 (1/50)

(2)上層

検出された主な遺構は掘立柱建物1棟、ピットである。

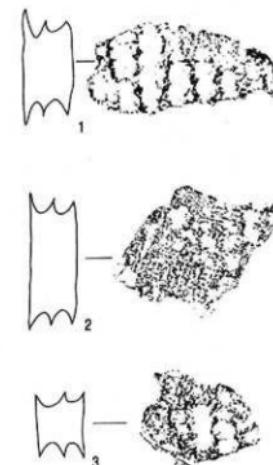
掘立柱建物 (S B02)

第8層で整地した上に建てられる。11-8・8-6・6-12で囲まれた部分が建物推定範囲で、東側は調査区外に広がる。柱穴規模にややばらつきが見られ、大きいものは直徑25~30cm・深さ20~30cm前後、小さいものは直徑15cm・深さ20cm前後を測る。間尺は11-8が200cm、8-6が240cm+190cm、6-12が80cm+220cmと不規則である。間仕切りと考えられる7-10・10-11の間尺は、210cm・250cmを測る。底部分と考えられる1-3・1-4・3-5は柱穴規模が小さく、直徑15~20cm・深さ10~15cmを測る。間尺は1-3が180cm+180cm、1-4が40cm、3-5が55cmである。

3 遺物

整地層より繩文土器が10点出土した。これらは全て小破片の状態で出土し、遺構に伴うものは無かった。多くは磨滅しており調整方法は不明であった為、ここでは調整の分かるもののみを図示した。

出土した繩文土器は全て深鉢の体部破片である。1~3は、柱の大きいLR繩文を外面に施す。



第6図 出土遺物（実大）

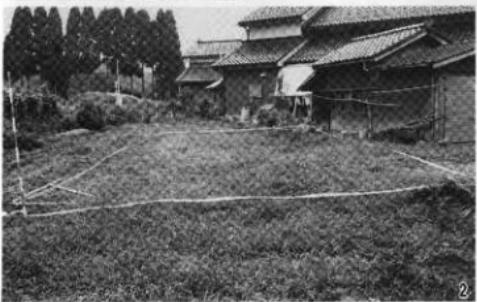
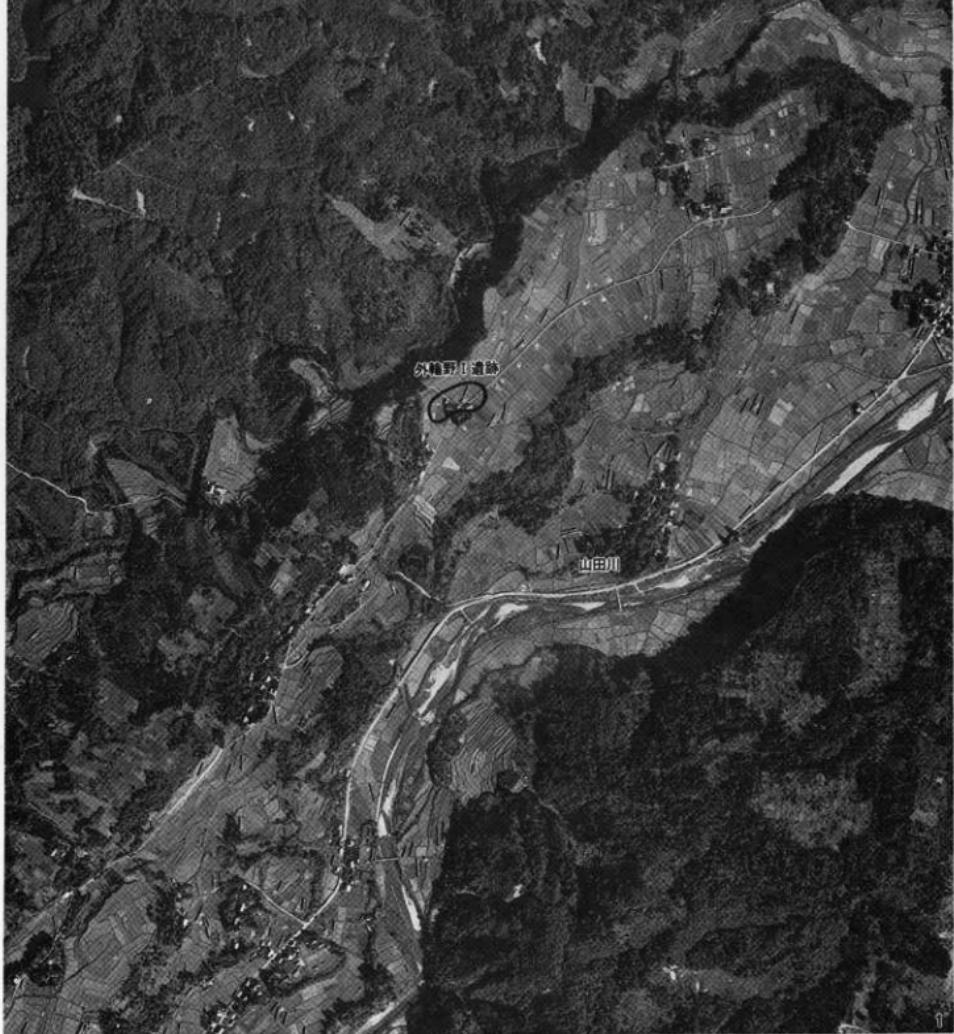
IV まとめ

今回の調査では2時期の掘立柱建物が見つかった。建物に伴う遺物が無い為、築造年代の特定は出来ないが、柱穴の規模や配列に不規則さが見られる事などから中世後半以降のものであろう。下層の建物は規模が小さく、柱の規模・配列も不規則である為、納屋のような簡易な建物だったと思われる。また、上層建物建築時の整地の際に受けた擾乱が、調査区南側を中心に見受けられ、下層遺構面に残る不規則な配列のピット群もその影響によるものであろう。上層建物の構造は、柱の配置から推測すると、西側に庇があり北西には間仕切りされた空間があったと考えられる。中世以降、遺跡周辺には衝波に抜ける旧道が通っていたとされており、その沿線に現在の集落に通ずる小集落が形成されていたものと推定し得る。

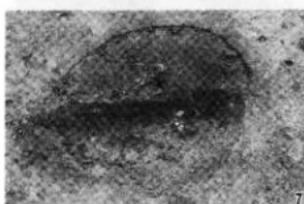
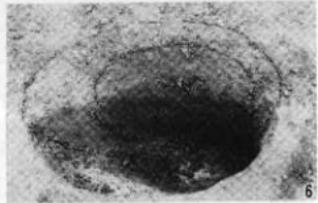
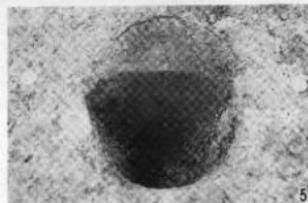
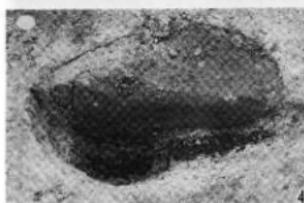
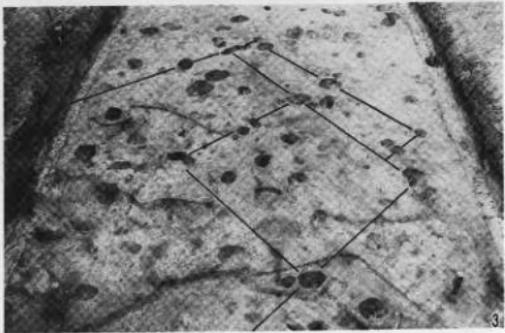
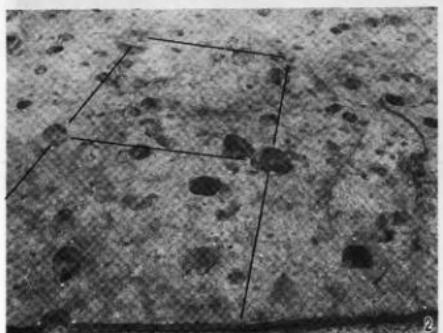
また当地区には、下層掘立柱建物建築以前に既にSK04、SD01・02といった土坑・溝がつくられているが、遺物が伴わない為、その性格や帰属年代は不明である。尚、唯一出土した繩文土器は全て小破片であり、遺構に伴うものではない。これについては、本遺跡は北東で繩文時代に形成された鏡坂I遺跡と接する為、そこから流れ込んだ可能性が高い。

参考文献

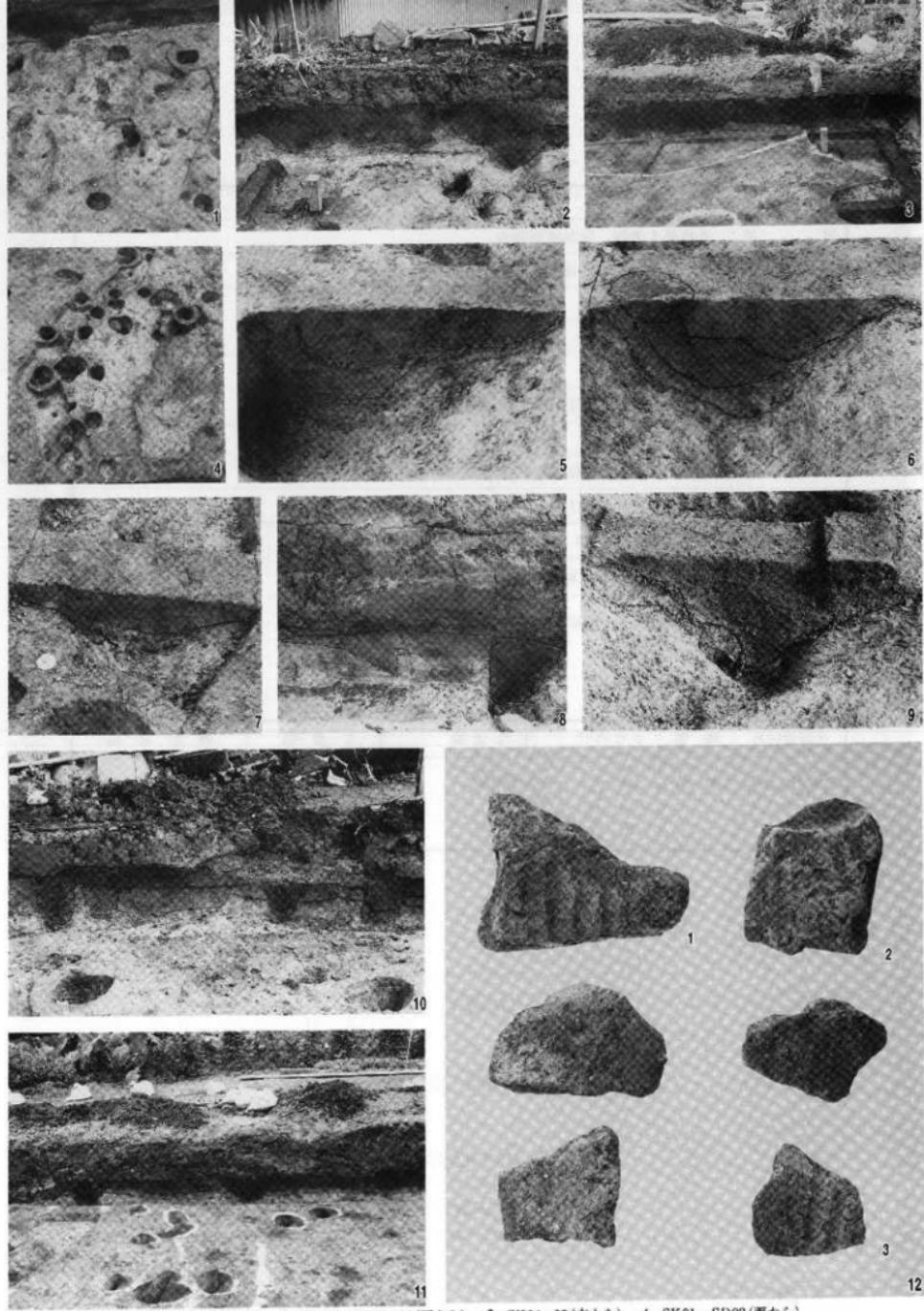
- | | |
|--------------|-------------------------------------|
| 婦中町教育委員会 | 1984『蓮花寺遺跡の調査－富山県婦中町蓮花寺所在の中世遺跡調査報告』 |
| 婦中町教育委員会 | 1995『富山県婦中町中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』 |
| 婦中町 | 1967『婦中町史』 |
| 富山県埋蔵文化財センター | 1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』 |



図版1 1.航空写真 昭和47年国土地理院撮影 (1/10,000) 2.調査前の状況 3.遺構検出状況 (南から)



図版2 1.全景(南から) 2.SB01(東から)
3.SB02(北から) 4.SB02P6 5.SB02P8 6.SB02P2 7.SB01P1
8.SB01P3 9.作業風景



図版3 1 .SK03・04・SD01(西から) 2 .SK04・SD01・04(西から) 3 .SK04・05(南から) 4 .SK01・SD02(西から)
 5 .SD01(西から) 6 .SK01(西から) 7 .SD02(西から) 8 .SK06(西から) 9 .SK03(西から) 10 .東壁(西から)
 11 .西壁(東から) 12 .出土遺物(数字は実測番号)

報告書抄録

ふりがな	そとわのいち						
書名	外輪野I遺跡 発掘調査報告						
シリーズ名	農業施設建築に係る埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号							
編集者名	片岡英子 堀内大介						
編集機関	婦中町教育委員会						
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 田 (0764) 65-2111						
発行機関	婦中町教育委員会						
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 田 (0764) 65-2111						
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
外輪野I遺跡	富山県婦負郡 婦中町外輪野	016362	139 38° 38' 32"	137° 06' 45"	960917～ 961011	80 m ²	農業施設建築 に係る事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
外輪野I遺跡	集落	縄文 中世 近世	掘立柱建物 溝 土坑	縄文土器			

平成9年3月31日発行

外輪野I遺跡 発掘調査報告

編集 婦中町教育委員会
 発行 婦中町教育委員会
 富山県婦負郡婦中町速星754
 印刷 日興印刷株式会社